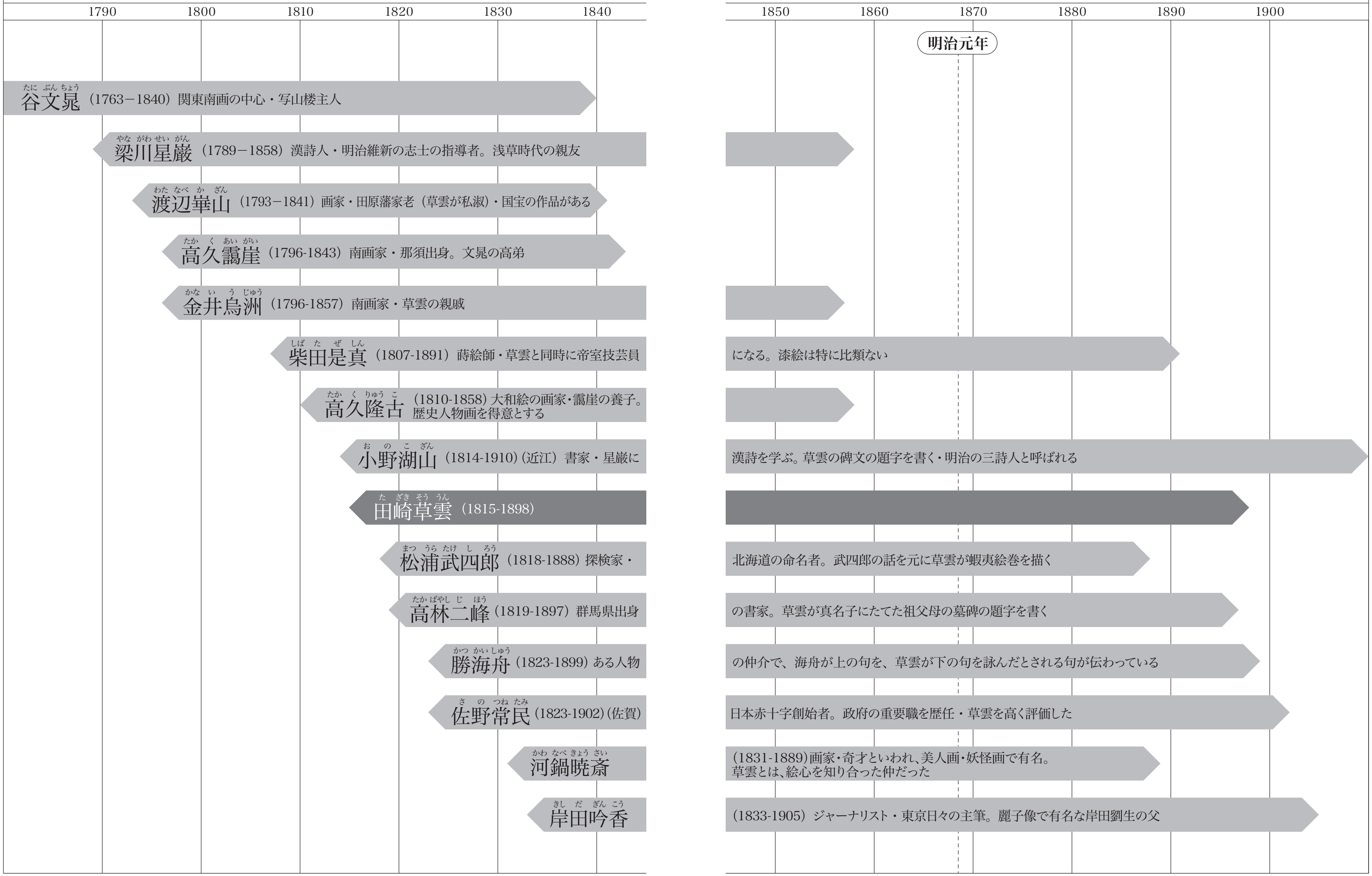
田崎草雲関係人物図



谷文晁（1763−1840）関東南画の中心・写山楼主人

梁川星巌（1789−1858）漢詩人・明治維新の志士の指導者。浅草時代の親友

渡辺崋山（1793−1841）画家・田原藩家老（草雲が私淑）・国宝の作品がある

高久靄厓（1796-1843）南画家・那須出身。文晁の高弟

金井烏洲（1796-1857）南画家・草雲の親戚

柴田是真（1807-1891）蒔絵師・草雲と同時に帝室技芸員になる。漆絵は特に比類ない

高久隆古（1810-1858）大和絵の画家・靄厓の養子。歴史人物画を得意とする

小野湖山（1814-1910）（近江）書家・星巌に漢詩を学ぶ。草雲の碑文の題字を書く・明治の三詩人と呼ばれる

田崎草雲（1815-1898）

松浦武四郎（1818-1888）探検家・北海道の命名者。武四郎の話を元に草雲が蝦夷絵巻を描く

高林二峰（1819-1897）群馬県出身の書家。草雲が真名子にたてた祖父母の墓碑の題字を書く

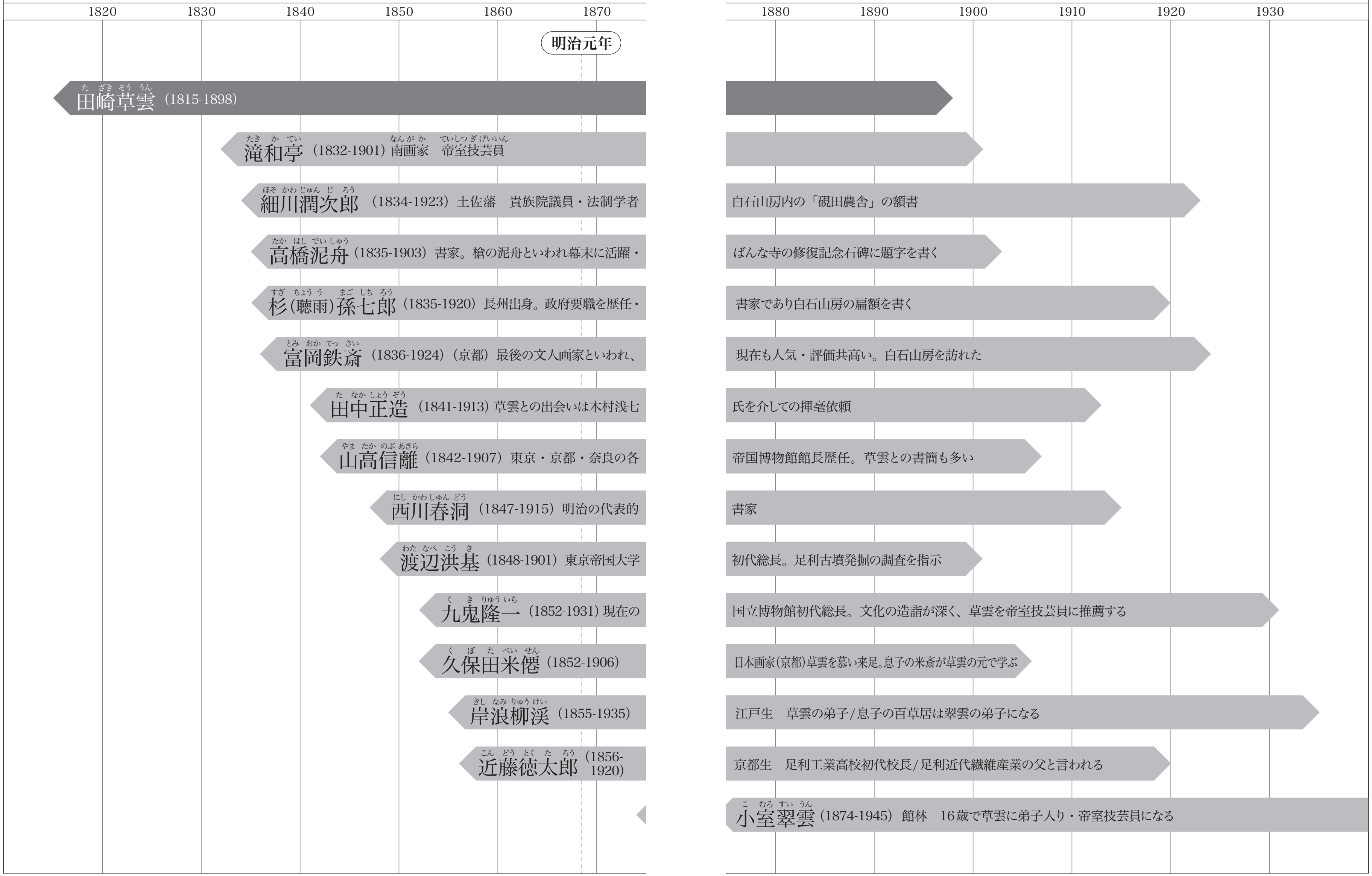
勝海舟（1823-1899）ある人物の仲介で、海舟が上の句を、草雲が下の句を詠んだとされる句が伝わっている

佐野常民（1823-1902）（佐賀）日本赤十字創始者。政府の重要職を歴任・草雲を高く評価した

河鍋暁斎（1831-1889）画家・奇才といわれ、美人画・妖怪画で有名。草雲とは、絵心を知り合った仲だった

岸田吟香（1833-1905）ジャーナリスト・東京日々の主筆。麗子像で有名な岸田劉生の父

田崎草雲関係人物図



田崎草雲（1815-1898）

滝和亭（1832-1901）南画家　帝室技芸員

細川潤次郎（1834-1923）土佐藩　貴族院議員・法制学者　白石山房内の「硯田農舎」の額書

高橋泥舟（1835-1903）書家。槍の泥舟といわれ幕末に活躍・ばんな寺の修復記念石碑に題字を書く

杉（聴雨）孫七郎（1835-1920）長州出身。政府要職を歴任・書家であり白石山房の扁額を書く

富岡鉄斎（1836-1924）（京都）最後の文人画家といわれ、現在も人気・評価共高い。白石山房を訪れた

田中正造（1841-1913）草雲との出会いは木村浅七氏を介しての揮毫依頼

山高信離（1842-1907）東京・京都・奈良の各帝国博物館館長歴任。草雲との書簡も多い

西川春洞（1847-1915）明治の代表的書家

渡辺洪基（1848-1901）東京帝国大学初代総長。足利古墳発掘の調査を指示

九鬼隆一（1852-1931）現在の国立博物館初代総長。文化の造詣が深く、草雲を帝室技芸員に推薦する

久保田米僊（1852-1906）日本画家（京都）草雲を慕い来足。息子の米斎が草雲の元で学ぶ

岸浪柳渓（1855-1935）江戸生　草雲の弟子/息子の百草居は翠雲の弟子になる

近藤徳太郎（1856-1920）京都生　足利工業高校初代校長/足利近代繊維産業の父と言われる

小室翠雲（1874-1945）館林　16歳で草雲に弟子入り・帝室技芸員になる